

日本社会福祉教育学会

Japanese Society for the study of Social
Welfare Education

NEWS LETTER No.47

事務局

〒998-8580 山形県酒田市飯森山 3-5-1

東北公益文科大学 小関研究室 気付

TEL 0234-41-1288 ☎ : info@jsswe.org <http://jsswe.org/>

2025年3月31日発行

目次

1. 巻頭言..... 1
「社会福祉教育におけるコミュニケーション」日本社会福祉教育学会理事 工藤 英明
(青森県立保健大学)
2. 日本社会福祉教育学会 第12回春季研究集会.....3
◆参加者の声..... 岡本 周佳 (関西学院大学)
3. アポリア連載4
「短期大学教育を考える」日本社会福祉教育学会理事 阪口 春彦
(龍谷大学短期大学部)
4. 専門教育とは、「〇〇〇」である！.....5
専門教育とは、「理想の専門職像を目指した土壌づくり」である！
小渡 加依 (特別養護老人ホームせんだんの館)
専門教育とは、「枠を超える力を育むこと」である！
宮本 雅央 (北海道医療大学)
5. お知らせ 8
6. 編集後記 8

1. 巻頭言

社会福祉教育におけるコミュニケーション



☞ 理事 工藤英明会員
(青森県立保健大学)

日本社会福祉教育学会 理事 工藤 英明 (青森県立保健大学)

巻頭にあたり、日々の教育実践を振り返り、教育とコミュニケーションについて若干の私見を述べてみたい。

現在の社会福祉教育は、資格養成カリキュラムに示されている制度・政策系と支援方法系科目に大別される。さらに、教授方法は、講義系科目と演習・実習系科目に大別される。講義系科目は、多数の学生を対象に知識の伝達や解説が中心となり、双方向・参加型を意識しても、一方向的コミュニケーションに近い。理解度の把握は、リアクションやレポート、テストを通して把握することになる。他方、演習系科目は、スキルの

獲得や知識応用など実践的・知的トレーニングとして、双方向的で相互・交互作用を用いたコミュニケーションが可能であり、スキル獲得の程度の把握は、実技試験の也可能となる。実習では、指導者の指導や観察により経験知や暗黙知の獲得も期待される。しかし、これらは伝える側と受け取る側双方ともに意識的なコミュニケーションではない場合が多く、学生の学びに大きな差が生じていると感じる。具体的には、指導者は上手く言語化できないながらも、高度な実践を行っている。一方の学生は、それらを意識的に観察していない場合、見逃すこともあり得る。

近年、教育場面でのコミュニケーション方法は、旧来の対面での講義、配布される活字媒体資料に留まらず、ICT や動画、各種デバイス、VR 教材の活用も広く導入されている。また、リモート、オンデマンド、クラウドや SNS を用いたレポート添削もできる。オンデマンドや SNS による教育は、時差を有するコミュニケーションであり、オンデマンドは一方的、SNS は活字による添削となる為、ニュアンスや相手に合わせて伝えるための細やかな工夫や言葉が必要となる。新たな教育手法や教材が開発、進化しても、多様なコミュニケーション素材をさらに工夫する必要がある。

近年、学生個々の特性は多様化しており、教育場面での SW 的コミュニケーションも求められている。所属機関の大学院教育では、教育の質の担保からポートフォリオが導入され、教員と院生間の指導経過のコミュニケーションの見える化も図られている。教育とコミュニケーションは形を変えても切り離せない重要な要素である。

最後に、自身の臨床及び教育場面での人材育成に関する座右の銘を紹介して終える。「してみせて、言って聞かせて、させてみて、褒めてやらねば、人は動かじ」(諸説あり/上杉鷹山・山本五十六)。



2. 日本社会福祉教育学会 第 15 回春季研究集会

2025 年 3 月 16 日、日本社会福祉教育学会 第 15 回春季研究集会（オンライン）が開催されました。

本学会では、2022 年度から 2024 年度までの期間、2 カ所・240 時間実習の実施に関連するシンポジウムやワークショップを行なってきました。これらをもとに、本研究集会では、そこから導き出された実習実施にあたり、①異なる 2 カ所の実習をどのようにつなぐのか、②異なる 2 カ所目の実習先との連携のあり方、③実習先・養成校・実習生それぞれへの負担増にどのように対応すべきか、という 3 つの課題を柱として、特色ある方法で実習を実施している養成校からの実施報告を行いました。そして、さらに各校の工夫などを出し合い、3 つの課題への対応を参加者と話し合いながら進められました。

ご参加頂いた皆さま、ありがとうございました。

13:00	開会 挨拶（日本社会福祉教育学会会長 志水 幸氏）
13:10	各養成校からの実施報告 高杉 公人氏（新見公立大学） 小野 セレスタ摩耶氏（同志社大学） 竹森 美穂氏（関西学院大学） コーディネーター：川島 恵美氏（関西学院大学）
14:10	休憩
14:20	登壇者及び参加者によるディスカッション 「3つの課題への対応・工夫について」
15:00	各グループからの報告
15:30	閉会



【参加者の声】

第 15 回春季研究集会に参加して

👤 高杉公人会員
(新見公立大学)



岡本 周佳 (関西学院大学)

2024 年度に入会し、初めて春季研究集会に参加させていただきました。今回の研究集会は、新カリキュラム導入後の 2022 年度から継続的に議論や検討を行なってこられた 2 か所・240 時間 実習に関する総まとめという位置づけでした。これまでの議論を十分に理解できていない立場ではありますが、参加の感想を少し述べさせていただきます。

まず、1 番目の報告者である高杉公人先生の新見公立大学では、1 か所目に 210 時間の中山間地域での地域滞在型実習を実施し、2 か所目に学生の目指す領域に応じたソーシャルワーク実習を実施している点が特徴ではないかと思えます。210 時間の実習の中で地域の事例研究と個別の事例研究を連動させて学べるようにしたうえで、最終的には学生がプロデュースをして実習地域での発表会まで行っているということが印象的でした。また、交通費・宿泊費を大学が原則補助することは学生にとっての負担軽減や公平感の担保にもつながると感じました。加えて、実習引き継ぎ書や実習支援システム、実習調整会議といった、1 か所目と 2 か所目のつなぎを意識した取り組みも大変学びになりました。

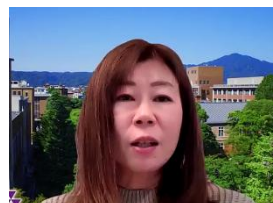
2 番目の報告者である小野セレスタ摩耶先生の同志社大学では、1 年次に 60 時間の基礎実習を必修としており、3 年時の夏休みに 2 か所目の 180 時間実習を実施している点が特徴だと感じました。基礎実習で学ぶ内容を明確にして枠を定め、学びの土台をつくった上で、専門実習において他の内容をカバーしているという点が印象的でした。

1 年次に実習を必修とすることで 2 年次に進路を考える時間ができるというお話もありましたが、同時に、社会福祉の実践現場やソーシャルワーカーとして働くことへのイメージ付けにもつながるのではないかと考えました。また、60 時間の専門実習では、カリキュラム変更に伴って新たに配属が可能となった機関・施設へも配属しているという点も興味深く感じました。

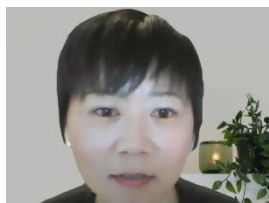
関西学院大学の竹森美穂先生からは、新カリキュラムが始まってから 3 年間の試行錯誤についてのご報告がありました。関西学院大学は、巡回指導担当教員が非常勤も含めて人数が多い点、240 時間実習を 3 年次にすべて実施している点が特徴的だと思います。そうした中で、1 か所目の 40 時間実習について 3 年間で異なる方式で実施した報告もありました。①春学期内に分散して実施、②夏休みに実施、③春学期内に集中的に実施、の方式それぞれのメリット・デメリットも示されました。40 時間実習の位置づけや巡回担当教員間の連携が課題という点もご報告がありました。

3 名のご報告ののちの質疑応答では、各大学の実習の進め方・考え方がより具体的にイメージできました。

社会福祉士養成としての実習における基盤・共通となる学びを担保しながら、各大学の状況やあり方、また社会や時代に応じた実習のあり方を追求していく上で、今回の学びを具体的に私自身の実習教育にも活かしていきたいと考えています。



👤 小野セレスタ摩耶氏
(同志社大学)



👤 竹森美穂会員 (関西学院大学)



👤 川島恵美会員 (関西学院大学)

3. アポリア連載

ニュースレター45号より、「アポリア連載」が始まりました。

「アポリア連載」は、会員の皆さまが、本学会の研究対象は「高等教育における社会福祉専門教育」という認識のもと、さまざまな高等教育機関から社会福祉教育のあり方を考えるきっかけとなれば、という思いより本連載を始めました。

第3回目は、本学会理事である阪口春彦会員（龍谷大学短期大学部）です。



「短期大学教育を考える」

日本社会福祉教育学会 理事 阪口 春彦
(龍谷大学短期大学部)

学校教育法第83条において、「大学は、学術の中心として、広く知識を授けるとともに、深く専門の学芸を教授研究し、知的、道徳的及び応用的能力を展開させることを目的とする」と規定されているのに対し、同法第108条において、「深く専門の学芸を教授研究し、職業又は实际生活に必要な能力を育成することを主な目的」とし、修業年限を2年または3年とする大学を短期大学と称すると規定されている。つまり、短期大学は、学校教育法において大学の制度の枠内に置かれたものと位置づけられ、学校種としては大学の一類型とされているということであり、短期大学とそれ以外の大学との違いにはその目的と修業年限があるということである。

ここで問われるべきこととして、「深く専門の学芸を教授研究し、職業又は实际生活に必要な能力を育成する」という目的を達成することが、2～3年間の教育で十分なのかということがある。社会福祉教育においては、社会福祉士等の専門職の養成教育が2～3年間で十分なのかということである。

たとえば社会福祉士については、卒業後に1～2年以上の実務経験が必要であるが、短期大学も社会福祉士国家試験の受験資格を得ることができるルートの一つとして位置づけられている。しかしながら、社会福祉士の専門性の高度化が求められている現在においては、2～3年間の社会福祉士養成教育は困難であるとの声も聞かれる。とくに、社会福祉士の新養成カリキュラムにおいて、実習時間が180時間以上から240時間以上に変更となったことにより、学生が課外活動などに充てられる時間が短くなってしまっている。課外活動などをとおしての学びも重要であり、4年制大学と比べ短期大学の学生にとっては相対的にその影響は大きい。また、高校卒業後1～2年目で実習を行うケースが多く、社会経験等の不足から実習の実施に不安を感じる場合もある。しかしながら、社会福祉士の専門職として立派に活躍している短期大学の卒業生も多い。短期大学で指定科目を学び、卒業後に実務経験を積むことによってより実践能力の高い社会福祉士になれる可能性もあると言える。

また、短期大学とそれ以外の大学とでは、卒業後の進路にも違いがある。具体的に言うと、短期大学の卒業後の進路には、4年制大学等への編入学がある。筆者が所属している龍谷大学短期大学部は、4年制の総合大学に併設されていることもあり併設大学への編入学希望学生が非常に多く、編入学先の学部・学科等もさまざまであり、多様な進路の希望を持つ学生に対してどのような教育を行うのかは難問である。本学の場合、「編入学準備プログラム」を設けるなどして、さまざまな学部・学科等に編入学する学生への対応を行っている。社会福祉系以外の学部・学科等への編入学を希望する学生には、社会福祉に興味を持とうとしない者もいるが、社会福祉学は学際的であり、社会福祉はどのような学問とも何らかの関係はあるため、短期大学において社会福祉についてしっかりと学んでもらうとともに、編入学後の学習に備えるために希望する学問分野についても学ぶ機会を提供すること、そして社会福祉と希望する学問分野とのつながりに気付かせることが重要であると考えられる。

もう一つ重要なことは、入学定員を満たしておらず入試の選抜機能が十分に働いていない短期大学が多ということである。選抜機能が十分に働いていない場合、短期大学士にふさわしい力を身に付けて卒業できるようにすることは容易ではないが、入学生として受け入れた以上、

リメディアル教育をはじめ、分かりやすく興味を持ちやすい教育内容・教育方法の導入など、さまざまな教育的対応を行い、短期大学士にふさわしい力を身に付けて卒業できるように努めることが必要である。

とくに社会福祉系の学科等については、入学定員の確保がより困難になっているため、社会福祉系の学科等を擁する短期大学が減少し、短期大学における社会福祉教育のあり方を考え学び合う機会が減少しているように思われるが、短期大学における社会福祉教育を行う教員等が、上記のような課題にどのように対応すべきなのか、本学会などをおして考え学び合うことが重要であると言えよう。



4. 専門教育とは、「〇〇〇」である！

ニュースレター45号より始まった「専門教育とは、「〇〇〇」である！」は、実践者・研究者、各々の立場で「専門教育」について考えるきっかけとなれば…という思いより、スタートしました。

若手研究者や現場の実践者を中心に、その人自身が考える「専門教育」とは何であるのかを「〇〇〇」という一言で表現してもらい、その理由（何を以て専門教育としているのかなど）などを教えていただく内容です。

第3回目は、小渡加依会員（特別養護老人ホームせんだんの館）、宮本雅央会員（北海道医療大学）の熱い想いをお届けします。

専門教育とは、「理想の専門職像を目指した土壌づくり」である！

小渡 加依（特別養護老人ホームせんだんの館）

はじめに

私は、介護職員を経て、特別養護老人ホームの生活相談員として勤務しております。2021年には社会福祉士養成・新カリキュラムが改訂され、多様化・複雑化する人々の生きにくさに対して、ミクロ・メゾ・マクロレベルの連続性によるソーシャルワークの実践が求められると知り、自らの知識不足と実践力に限界を感じたことを機に、2024年に東北福祉大学 大学院（修士課程）に入学をしました。働きながら専門教育を学び直している立場にいます。今の私が考える「専門教育」とは何か、一考察として私見を述べさせていただきます。

専門職としての土壌づくり

時代の変化に応じて、ソーシャルワーク専門職のグローバル定義や日本社会福祉士会の倫理綱領・行動規範が改定され、社会福祉士養成カリキュラム、各種の施策や制度も改正を繰り返してきました。その時代ごとの理念の実現を目指して、必要な専門教育を学ぶことが必要不可欠だと思います。一方で、専門教育を受けただけで専門職になれる訳でもありません。専門教育とは、専門性を構成する「価値・知識・技術」という土壌づくりを繰り返す工程であり、専門職であり続けるための学びを導く機会だと思います。



学部時代は「講義—演習—実習」のカリキュラムやボランティア活動などを通じて、学生それぞれが抱く「こういう社会福祉士（ソーシャルワーカー）になりたい」という理想像を構築しながら、専門職としての土壌（価値・知識・技術）の基礎をつくる大切な時期だと思います。卒業後、自らが関わるフィールドや、求められる役割・機能に応じて、専門分野や関連分野に関する専門教育を学び続けることで、土壌をより深く、より広く、より豊かに肥やすこと。その積み重ねが、自らが理想とする社会福祉士像に近づく道のりであり、専門職であり続けることができるのではないのでしょうか。私の場合、大学院での学びが大きな刺激となり、仕

事や私生活での出来事に対する見え方が変化し、それらが多くの肥料となり、新鮮な空気となって土壌の循環が活性化されていると実感しています。

あたりまえを疑い、「問い」続ける感性

先日、退官を迎える恩師の最終講義を拝聴する機会に恵まれました。恩師は世の中の不条理や理不尽な状況下で懸命に生きている人々に焦点をあて、歴史的な背景や変遷から社会福祉学のあり方を「問い」続けてこられました。孔子の論語（為政第二 15）に、『学びて思わざれば則ち罔（くら）し、思いて学ばざれば則ち殆（あやう）し』という言葉があります。真にあるべき理想の学び方について、先人の知恵・教えを学ぶだけではなく、自ら考えて思案を巡らせなければ道理を理解できない。一方で、思案するばかりで学ばなければ考えが狭くなり、独断的になりやすいこと説いた言葉です。世の中のあたりまえ、専門職のあたりまえ、自分のあたりまえを疑い、それらが真にどのような意味や価値があるのかを「問い」直す感性を磨くことが、専門職の土壌をより豊かにすると思います。

おわりに

社会福祉士として、人々が生活する営みに脈々と受け継がれてきた普遍的なもののあり方を追い求めるためには、多くの人たちの考えや生き方に触れて、自ら学び、自ら考えることで「問い」への感性を磨くことが、専門職であり続けるために必要なのだと思案しました。また、自分と向き合い、人と向き合い、社会と向き合うための豊かな土壌づくりを育み、専門職であり続けるための学びを導く力が専門教育にあると思います。

最後に、このたびは「専門教育とは何か」について考える貴重な機会をいただき、誠にありがとうございました。至らない部分を含めて、今後も専門教育について考えてまいります。

専門教育とは、「枠を超える力を育むこと」である！

宮本 雅央（北海道医療大学）

専門教育とは、多様な社会課題に柔軟に対応し、新たな解決策を創出する能力を養成すること、そして新たな価値を生み出せる能力を習得することが重要であると考えます。簡潔に言い換えるならば、「既存の枠を超える力を育む」教育です。ここで述べた能力は、一般的な高等教育で掲げられる包括的な目標の一つであり、必ずしも社会福祉の専門教育に特有のものではないと捉えられるかもしれませんが、しかしながら、私は特に社会福祉の専門教育においてこそ、この能力を重視した取り組みを展開する意義が大いにあると考えています。

近年の「複雑化」しているといわれる地域生活課題への対応には、福祉・医療・教育・経済といった異なる分野を横断する視点が求められます。そして、この視点に基づいた実践には、地域にいる様々な人同士の協働（コラボレーション）が必要であり、そのコラボを実現するための仕掛け役が重要です。

このコラボに必要な要素には、ソリューション（課題解決）とイノベーション（新機軸、革新）が挙げられます。どちらも、今ある条件の中でより高い価値を生み出せるようデザインするという思考が含まれます。イノベーションは語源を辿ると「新機軸から捉えなおす」とか、「新結合を作り直す」というニュアンスがあり、「技術革新」よりも「捉え直し」が分かりやすい概念だと思います。そして、捉え直しデザインする思考の必要性は、現代的に急に現れたわけではなく社会事業家である J. アダムズの実践（木原 1998）の経過にも垣間見えると思います。そもそも、何を成すかという航海図に“その地域の人たちの暮らしの向上”があって、それを“みんなで成し遂げる”ために先人たちがコラボしてきた歴史を私たちは知っています。そして、現代的に必要なコラボを“誰がどのように仕掛けるのか”という問いに対して、社会福祉専門職が福祉という視座から登場すればいいと考えています。



専門教育では、単に既存の方法を学ぶだけでなく、新たな発想やアプローチを取り入れる力を培います。例えば、ICT（情報通信技術）を活用した福祉サービスの開発、地域の資源を活かしたコミュニティ支援のモデル構築などが挙げられます。学生たちは、こうした新しい取り組みを認識する中で彼らが置かれている社会の変化に適応しながら、持続可能な対人援助や福祉サービスのあり方を実現する方法を考案できます。さらに、先鋭的な取り組みの例と共に、その根底にある思想や哲学を同時に獲得できることは、教育関係者が提供する専門教育のあるべき姿の一つといえます。したがって、専門教育とは現状の枠の中で取り組めることと併せて、今は実現が難しい・新しいアイデアを学びつつ、その限界を認識し乗り越えるための思考を獲得する過程といえるでしょう。その中で学生たちに培われる思考が「枠を超える力」であり、その必要性を実感したり、アイデアの実効性や達成感を得られたりできるプログラムが必要であると思います。

さて、“その地域の人たちの暮らしを豊かにしたい”という願いは社会福祉専門職の専売特許ではなく、誰でも共有できる価値観だと思います。しかしながら、現代の社会システムにおける様々な状況の中で、何かの取り組みの目的や方法が合わないという複雑さがあります。ただし、入り組んだ仕組みの中で解決策を考えなければいけない状況自体は、最善を考え続けたり乗り越えるアイデアを形にし続けたりする誘因になっており、前向きに捉えられるとも思います。そして、複雑さがある中でも現状を改善していくという、人と人同士のコラボの発生源になっているともいえます。

様々な思想の人たちがバランスを取れる状況を作るためには、リスクコミュニケーション（経済産業省）に代表される、お互いの歩み寄りと相互の枠組みを理解しながら乗り越える過程（竹端 2012）が必要であると思います。それらを実現するための能力とは、“その人・状況に寄り添う”という対人援助の根本的姿勢が基盤にあります。そのため、もともと別の方向を向いているステークホルダー同士に社会的意義を踏まえて対話を促す仕掛け役には、その対象範囲に限界はないとされる（秋山 2007）人道的な感受性を持った社会福祉専門職が合うだろうと思います。

新たな価値を生み出す対話を実現するための社会福祉の専門教育は、固定された枠組みの中で知識を学ぶものではなく、多様な分野を横断し、新たな価値を創造することが求められます。そのためには、課題解決のための創造力、柔軟な思考、実践的な経験が不可欠です。こうした教育を通じて、社会の変化に対応しながら、人々の生活の質を向上させる新たな福祉の形を生み出していくことが可能になると思います。

参考文献

- 木原活信. (1998). “ジェーン・アダムズ -シリーズ福祉に生きる”. 大空社.
経済産業省. リスクコミュニケーション (METI/経済産業省). https://www.meti.go.jp/policy/chemical_management/law/risk-com/r_index2.html#MainContentsArea.
竹端寛. (2012). “枠組み外しの旅 -「個性化」が変える福祉社会”. 青灯社.
秋山智久. (2007). “社会福祉専門職の研究”. ミネルヴァ書房.



5. お知らせ

訃報

本学会の名誉会員である岡本民夫先生が、2024年12月11日(水)に満88歳でご逝去されました。心よりご冥福をお祈りいたします。

先生は2008年から2014年まで監事を務められるなど、長年にわたり本学会の発展のために大きな貢献を果たされました。

ご功勞に敬意を表しますとともに、皆さまに謹んでお知らせいたします。

コンテンツ募集中！！

イベント開催情報、便利で役に立つ教育ツールや教材、教育実践tips(コツや秘訣)、おすすめ動画やウェブサイトなどのコンテンツも、随時受け付けています。皆様にとっておきの情報を、事務局 (nl.jsswe@gmail.com) までどしどしお寄せください。

ご所属先やご連絡先(メール等)等、変更された会員の皆さまは、お手数ですが事務局(info@jsswe.org)までご連絡いただけますようお願い申し上げます。



6. 編集後記

日本社会福祉教育学会 ニュースレター47号をお読みいただき、ありがとうございます。

早いもので年度末となりました。今年度は、「アポリア連載」や「専門職教育とは、「○○○」である！」といった新しい企画を考え、進めました。ご寄稿くださった会員の皆さまからは、「改めて、自分自身の考えと向き合う機会となった」、「(考えることが)楽しかった！」など、多くの嬉しいお言葉をいただきました。ありがとうございます。



来年度もこちらの企画を続けていきたいと思いますので、ご協力いただけますと幸いです。

「是非とも熱い想いを書きたい!」「会員の皆さまに伝えたい!」という方は、こちら (nl.jsswe@gmail.com) までご連絡をお願いいたします。お待ちしております!

(ニュースレター編集委員 島谷綾部)